2022年度秋学期　関西大学総合情報学部
帰国生徒入学試験問題

小　論　文

注　意　事　項

1. 試験開始の指示があるまで問題用紙を開いてはいけません。
2. 別紙解答用紙所定の欄に受験番号を記入してください。
3. 解答はすべて黒鉛筆（HB）〈シャープペンシルは、HB0.5mm 以上の芯であれば使用可〉で別紙解答用紙所定の欄に記入してください。
4. 試験時間は 90 分です。
5. 問題は 2 種類あります。問題Ａ、問題Ｂのうちいずれか 1 つを選択し、解答してください。両方を解答することはできません。
6. 解答用紙は、必ず、選択した問題番号用の用紙を使ってください。

問題A

次の文章を読んで、以下の問いに答えなさい。

【問１】以下の文章を300字程度で要約しなさい。
【問２】深澤直人がデザインした傘立てとCDプレイヤーに共通する概念について、あなたの考えを500字程度で述べなさい。

深澤直人はこんなふうに言う。たとえば、傘立てをデザインするとした場合、まずすぐに出てくるイメージとして「円筒形」のようなものがある。しかし、深澤直人はそういう発想こそ排除すべきだと言うのだ。玄関先の壁面から一五センチメートルくらい離れたコンクリートの床面に、幅八ミリメートル、深さ五ミリメートルくらいの溝を彫っておけばいい。傘を置きたい人は先んじて、傘の先端を固定できるひっかかりを探す。その行為に先回りして彫られた溝は、間違いなくそれを探す傘の先によって発見され、結果として玄関先に傘は整然と並ぶことになる。この「溝」が傘立てである。しかし使っている人はこれを傘立てとは気づかないかもしれない。無意識の行為の結果として傘が整然と並ぶ。それでデザインは完了していると深澤は言うのである。

こんなふうに人間の行動の無意識の部分を緻密に探りながら、そこに寄り添うようにデザインを行うのが深澤流である。これは「アフォーダンス」という新しい認知の理論を連想させる考え方である。アフォーダンスは行為の主体だけではなく、ある現象を成立させている環境を総合的に把握していく考え方である。たとえば「立つ」という行為は主体である人間の意志的なふるまいであるかのようだが、実際には「重力」と「ある硬さを持った地面」がないと「立つ」ということは実現しない。無重力だと体が浮いてしまうし、水の入った深いプールでも「立つ」は成立しない。この場合、重力と硬い地面が立つという行為を「アフォード」しているという。

（中略）

深澤直人がデザインしたCDプレーヤーをご存じだろうか。それはほとんど「換気扇」の形をしている。中央にCDを装着し、換気扇のひもの位置に設置されたコードをひっぱるとCDは回りはじめる。ちょうど換気扇のように。それがCDプレーヤーだと分かっていても、脳に刻まれた換気扇の記憶が作用して、それを見つめる僕らの身体は身構える。特に頬あたりの皮膚は猛烈な繊細さで触覚のセンサーを活性させて、吹いてくる風を待機する。しかし風は来ず、かわりに音楽がそよいでくるのである。換気扇の形にデザインしたおかげで、オーディオ機器としての性能はやや犠牲になったかもしれないが、音楽を待ち受ける人間のセンサーを活性させることによって、相対的にそれは性能を増していることになるのかもしれない。このような魔法のような関係を、ものとデザインの間に構築するのが深澤の方法である。いずれにしても、通常のオーディオ機器とは発想の異なる無印良品のCDプレーヤーは世界的な人気を博すことになった。

出典：原研哉著　「デザインのデザイン」　岩波書店　2003年
（出題の都合上一部改変）

以上

次の文章を読んで、以下の問いに答えなさい。

【問１】以下の文章を200字以内で要約しなさい。
【問２】文中で批判的に指摘している「化石賞」の稚拙性と歪曲性について200字以内で述べなさい。
【問３】筆者のいう「環境原理主義」の意義を述べ、 この主義が生じた背景とこの主義の問題点についてあなたの考えを述べなさい（合わせて300字以内）。

最初に、ひとつのエピソードから始めましょう。2019年12月12日、スペインのマドリードで開催されたCOP25（気候変動枠組条約第25回締約国会議）での出来事です。

筆者は、経団連（日本経済団体連合会）ミッションの一員としてCOP25に参加していたのですが、その日、日本が2度目の『化石賞』を受けるという情報が入りました。『化石賞』とは、国際環境団体が地球温暖化交渉において後ろ向きな主張をした国に対して皮肉を込めて贈る賞のことです。「CO_2（二酸化炭素）をたくさん排出する化石燃料に囚（とら）われている」、「化石のように頭が古い」といった意味合いを込めているのでしょう。

『化石賞』の授賞式は、COPの会期中に毎日、夜6時頃、会場の一角で行われます。時間少し前に行ってみると日本のテレビカメラが何台も並んでいました。会場では、恐竜の化石のぬいぐるみがノソノソ歩き回っています。時間になると骸骨のコスチュームをきた覆面姿の男性が現れ、前日の小泉進次郎環境大臣のスピーチを取り上げ、日本が温室効果ガス削減の目標値を引き上げなかった、脱石炭に積極的な姿勢を示さなかったとの「罪状」を読み上げ、「よって日本に『化石賞』第1位を授与する」と宣言します。すると、日本の環境NGO（非政府組織）の女性が壇上にあがり、石炭を模した黒い塊の入ったバケツを持たされ、周囲の国際NGOの人たちが「恥を知れ、日本！」と言いながら黒い塊を彼女に投げつけます。正直いって、高校の文化祭のような催しですが、翌日の新聞では「日本、2度目の『化石賞』受賞」との見出しが躍ることになりました。

『化石賞』というのは、環境団体が自分たちの考え方と合わない主張をする国を一方的に断罪するものであり、公的なものではまったくありません。環境団体は、CO_2排出が多い石炭を目の敵（かたき）にしていますが、世界最大の石炭消費国・石炭火力輸出国である中国に対して『化石賞』を与えたことは一度としてありません。選定基準が大きく偏（かたよ）っているといってよいでしょう。アジアの途上国が経済発展のため、域内に潤沢（じゅんたく）に存在し、安価な石炭資源をできるだけクリーンに使うには高効率石炭火力が必要です。CO_2削減という単一の価値観をすべてに優先し、それに合わないものを否定することは「環境原理主義」そのものです。

筆者は、地球温暖化外交で交渉官を務めていたとき、日本の国益を守るために行った発言を理由に『化石賞』を何度も受賞しました。京都議定書第二約束期間への参加を拒否するステートメントを行ったときは、『化石賞』の第1位から第3位までぶち抜きで日本が受賞することになりました。けれども筆者は、むしろ勲章くらいに思っていました。彼らから賞賛されるような政策を採用すれば、日本経済が大きな打撃を被（こうむ）ると考えていたからです。

だから、「途上国への石炭火力輸出を何とかしたいと思ったが、新たな見解をだせなかった。『化石賞』をもらう可能性があると思っていた」との小泉進次郎環境大臣のコメントには失望しました。日本のメディアが大きく取り上げ、環境大臣が畏（おそ）れ入れば、環境NGOがますます嵩（かさ）にかかって日本を狙い撃ちするでしょう。「将来の首相候補」との呼び声もある小泉環境大臣ですが、COP25から現在に至るまでの彼の発言を見るにつけ、日本国の舵（かじ）取りを彼に委（ゆだ）ねたいとは思いません。彼に環境原理主義の色彩を強く感ずるからです。

出典：有馬純著　「亡国の環境原理主義」　エネルギーフォーラム　2021年

以上